



八 大王、キングうどん竜と決闘する

昼食を食べた僕たちは、近くの公園に行く。公園ではテントで、コーヒーやジュースを販売していた。

「コーヒー二つと、ハヤテは何にする？」パパが振り返った。

「オレンジジュース」僕はすぐに答えた。やはり、僕にはオレンジジュースがよく似合う。今度は、大王は何も言わなかった。僕たちはベンチに座った。風が気持ちいい。

「ふあああ。昼御飯を食べると眠たくなるなあ」パパがあくびをする。ママは目をつぶっている。大王も僕の胸のポケットの中で丸くなっている。僕もうとうとしだした。その時だ。

「何かおかしいぞ」大王が突然起き上がった。僕はその勢いで目を見開いた。だけど、パパやママは昼寝中だ。寝息を立てている。

「あっちへ行ってくれ。すぐにだ」大王が指を差した方向は、さっきのうどん店だ。僕はうどん屋の方に走る。ビルの谷間に、巨大なうどんが一本立っていた。

「うどん竜だ」大王が叫んだ。

「あれがうどん竜なの。どうしてお腹の中じゃなく、街の中にいるの？」

「わからん。ただ、さっき見た食べ残しのうどんが合体して大きくなったのだろう」

「残飯からうどん竜になるの？」僕は驚いた。うかうか食べ残しもできない。うどん竜は十階建てのビルに届くくらい巨大化していた。

「ははははは。人間どもめ。これまでよくも、俺たちをゴミとして捨てていたな。今度はお前たちの番だ」そう言い終わるや否や、うどん竜の口から白い粉が吹き出した。それを被った人々や車はその場で固まって動けなくなる。まさしく白い人間の彫刻だ。

「あの白い粉は、何？」

「たぶん、小麦粉だろう。人間への復讐だ」

「どうしたらいいの？」

「あんなにでかくなったんじゃ、わし一人では太刀打ちできん」

「じゃあ、この街は白い粉に覆われてしまうの。このままだと、街が、人が死んでしまうよ。何とかできないの」僕は大王に質問ばかりするけれど、自分では何もできない。その間にも、うどん竜は口から白い粉を吹き続けた。街全体が白い粉で覆われ始めた。

「いい考えがある」

大王は僕の胸ポケットから飛び出ると、僕の頭の上に乗った。

「仲間たちよ、集まれ」こんな小さな体から出るとは思われなような大きな声が響いた。白い粉を被って動けなくなった人々の口から、茶色い個体が飛び出すと、僕の周りに集まった。その数は、十、百、千、もう数えきれない。

「同じ大王立ちよ。一致団結して、うどん竜を倒すぞ」

「オー」歓声が上がった。茶色い個体たちは大王に次々と合体すると、みるみるうちにうどん竜と同じ大きさになった。僕は目の前のことが信じられずに、口をあぐりと開けたまま、ただ茫然と立ち尽くすだけだ。一体化した大王は、キング大王となってうどん竜に飛び掛かる。

「お前たちも、いつも人間に利用されているのに、何で、人間を助けるんだ」うどん竜がキング大王を睨みつける。

「わたしたちは人間と一心同体だ。それに、人間たちにはいつも注意している」キング大王はうどん竜の首を絞める。

「く、くるしい」すると、うどん竜の体から別の二つの頭が生えてきた。頭は全部で三つとなった。

「しまった。キングうどん竜に変身したか」それでも、キング大王は引き続き、一本の首を絞め続ける。

「離せ、離せ」残りのうどん竜の口から白い粉が吹き出され、キング大王の全身を覆う。

「しまった。体が動かん」キング大王の動きが止まった。声も出なくなった。

「人間の味方をするから」

「こうなるんだ」

「俺の攻撃を受けてみろ」

キングうどん竜の尻尾がキング大王の体に当たる。その度ごとに、キング大王の体から、ひとつ、ふたつと、小さな大王たちが離れていく。このままでは、大王の体がバラバラになってしまう。その時、僕の口から何かが飛び出た。

「大王。大丈夫ですか。僕が助けに行きます」

おしっこ王子だった。王子は大王と同じように、僕の頭の上で、「同じ王子たちよ。みんな、集まってくれ」と大声で叫んだ。白い粉に固まった人々の口から、黄色い液体の人形が飛び出て、僕の周りに集まった。

「よし。大王を助けるぞ」王子たちは合体すると、大王と同じように巨大化した。キング王子の出現だ。キング王子はキングうどん竜に向かって行く。

「こんどはおしっこ王子か。誰が来ても一緒だ。俺にはかなわないぞ」

キングうどん竜の三つの口から白い粉が吐き出される。

「危ない」僕は叫んだ。キング王子の体はキング大王と同じように全身が白い粉で覆われた、だが、白い粉はすぐさま溶けて行く。液体のキング王子には白い粉は効かないのだ。キング王子は体を二、三回震わせ、白い粉が体に付着していないのを確認すると、キングうどん竜の体に飛び着いた。

「やめろ」

「やめろ」

「やめろ」

キングうどん竜の三つ口から叫び声がした。そんな声を無視して、キング王子はキングうどん竜の体に抱きつく。キングうどん竜の体がキング王子の体の中に吸い込まれた。キングうどん竜はキング王子の体の中で暴れるものの

「息が」

「息が」

「息ができない」と声を詰まらせ、三つの首はぐったりと折れた。

「よしいまだ」キング王子はキング大王の体に液体をかける。粉が流され、キング大王は元の通り動きを取り戻した。

「助かった。ありがとう、キング王子。今度はわしの番だ」

キング大王はキング王子の体からキングうどん竜を掴みだすと、柔らかくなった体を粉々に引きちぎった。地面に散乱する白い塊。

「だが、問題はその後だな」

大王は粉々になったキングうどん竜を拾い集め、港まで運ぶと海に流した。海は一面白く濁った。その白濁を目指して、タイやカレイ、アジにタコなど、魚たちが集まって来る。魚たちは粉々になったキングうどん竜をエサとして食べた。海は再び、青く澄んだ。

「その魚を、また、主たちが食べるんですね」

「そうだ。食物連鎖だ」

キング王子の言葉にキング大王が頷いた。キングうどん竜が倒れたので、大王や王子は、再び、バラバラになって、元の人間の口の中に戻っていく。すると、体中に付着した白い粉は溶け、街の人たちは何事もなかったかのように、再び、動き出した。僕の目の前には、僕の大王と僕の王子がいた。

「大王。まだ、社会見学しますか」

「いや。今日は疲れた。元に戻る。じゃあ。またな。わしが言ったことは守るんだぞ」

「も、もちろんだよ」僕が頷くと、その開いた口から、大王と王子が飛び込んだ。

「うんぐ」僕は、再び、うんことおしっこ、いや大王と王子を飲み込んだ。

僕が公園に戻ると。パパとママは何事もなかったかのように目覚めていた。

「どうしたんだ」

「どこへ行っていたの」

「いやあ、ちょっとトイレ」

「そうか。もうこんな時間か。さあ、帰るか」パパが公園の時計を見た。針は3時を指していた

。

「そうね。帰りましょう」ママが立ち上がる。

「でも、二人とも、まだ、カップにコーヒーが残っているよ。そのまま捨てるよ、キングコーヒー竜が現れるよ」僕は慌てて二人にカップを手渡した。

「なんだ。それ」

「テレビの見すぎじゃない」

「それでも、もったいないのは事実だな」

「そうね。もったいないね」パパとママはカップを斜め百四十五度に傾けると、底に残ったコーヒーを飲み干した。

帰る途中、キングうどん竜が出現したことが嘘のように、街は人々で賑わっていた。今後、飲食店からは、うどんなど残飯の量が少しは減るだろう。それぞれの人の体の中にいる大王と王子が主に「もったいない」と注意してくれるはずだ。

